

# 「ロータリーは国際化を促進できるか？」

中島 ご紹介された私、2640地区、大阪南部の和歌山県を含む地区のバスターガバナーです。1986～87年度にガバナーを務めました。冒頭に御礼を申し上げたいのですが、先程は2780地区からインドで行われるポリオのワクチン一斉供与に際して、たくさんの浄財を寄贈されて、私はこの月の19日にエバンストンで開かれるポリオプラス委員会に参るので、その席にブラウン会長、パウロ・コスタ委員長も来場します。必ず皆さん方の温かいご支援があったことを伝えたいと思います。本当にありがとうございました。

今、ここに舞台上上がっている4人は皆さん方の地区は1人もいません。この地区にはたくさん素晴らしいシンポジストがおられるが、私ども地区外から参りました。

今日話をする国際奉仕の分野で、皆さん方が今まで聞いたことのない、経験したことのない体験や考え方を是非、披露してほしい、それが皆さん方には一番参考になるだろうと思って、こういうふうなメンバーをお願いしたわけです。

先程各クラブのご紹介があった時よりは少し人数は減ったかなと思いますが、クラブの会長や幹事は残っていると思うので、ぜひ、今日の話はクラブに帰ってからお伝えしたいと思います。それに心を動かされて、こちらでも何かやろうかと思ってもらえれば私どもの本望です。ぜひお伝えしたいと思います。

今日の私達のテーマは「ロータリーは国際化を促進できるか」という会議です。少しくだいて申し上げると、国際化を促進するというのは、結局は国際の際、きわをなくすることだと思う。日本では各ロータリークラブがまた地区が行っている国際奉仕の活動が国際のきわをなくすのに実際に役立っておるのであるか、そういう方向で活動を行っておるだろうかという問題を提起して、皆さん方とともに考えたいのが今日のテーマです。



昨今、新聞やテレビでよく目にするわけだが、日本人の考え方と海外の方の考え方、日本人の常識と世界の常識とは乖離がある、同じものではないとよく言われます。

実業界においても政治の世界においても最近では金融業界においても、どうも日本の常識は通らない。外国から言うと、日本人の顔はよく見えないとよく言われる。

しかしロータリーの世界では、私はこの常識が共通ではないか。私どものロータリーの集まりは思いやりの普及に励んでおります。国際奉仕の分野においても、きわを超えて思いやりを普及させる努力をお互いしています。最終の目的は世界平和です。同じ目的、同じ理念、同じ哲学で考え、行動をとっておる私たちロータリアンの中では、日本と外国との間には差異はないのではないかと私は思います。

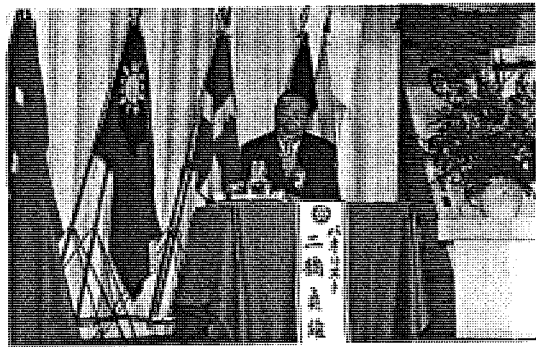
これは建前であって、実際はどうか、皆さん方のクラブや分区分区で行われている国際奉仕はその方向に進んでいるだろうか。ぜひ今日話を踏まえてご一考願って今後の参考にしてほしいと思います。

今日登場されたご三方は、それぞれ大変ユニークな国際奉仕活動を今までにしてきた方々です。ご経験、お考えをお聞き頂きたいというのが今日の狙いです。

一番最初にお話されるのは、昨年度の2650地区の京都、滋賀、奈良、福井を含んだ大き

な、日本で一番会員数の多い地区の直前ガバナーである二橋さんにお話願うわけで、先程のポリオのワクチン一斉供与の中で非常に熱の込められたご奉仕をされました。はたで見ていた私まで非常な感動を誘われました。その生々しいお話なのでよくお聞き願いたいと思います。それでは、まず二橋さん、よろしくお祈りします。

二橋 私はただ今、ご紹介を頂いた、1994～95、つまり昨年度、京都、滋賀、奈良、福井、一府三県、2650地区のガバナーをおおせつかりました。当地区の神崎さんは同期のガバナーです。二橋貞雄と申します。どうかよろしくお祈り申し上げます。



昨年度、私どもの地区大会、2780地区の蔵並定男元R I 理事ご夫妻がR I の会長代理としてお越し頂いてロータリーの昨年度の方針、あるいは新しいロータリー情報に関して、オンセオリー、インアクション論を縦横に展開された本当に格調高いアドレスを頂戴しました。私どもの2650地区ロータリアンに大きな感銘を頂戴したことに高い席から御礼申し上げる次第です。

また本日私どもの司会をしていただく元ロータリー財団管理委員会委員の中島治一郎さんは昨年度、アナハイムの国際協議会の会場で私、初めてお出合いをしました。2650地区に世界社会奉仕、WCSポリオプラスの推進をやってほしいという強い要望を受けました。結果的にそれをやり遂げることができました。面目をほどこしたわけですが、そこらの経過を踏まえた話を本日せよということで、伝統ある2780地区の地区大会の壇上に上

がった次第です。

私の話が本日のテーマである「ロータリーは国際化を促進することができるのか」という大きなテーマに果して合うのかどうか、まことに心もとない次第ですが、よろしくお祈り申し上げる次第です。

2650地区が昨年度、ポリオプラス計画に取り組み、それをやり遂げることができたのは、中島さんとの出会い、強い要請があったということが、非常に大きなモーメントでありました。

私どもの地区にはWCSを地区一本、集団奉仕、ウイサーブという形で過去積み上げてきた、という経験と実績、そういう素地もあったのは事実です。その裏付けをなすものは、会員1人当たり2,000円、私どもの会員は6,500名であるから、1,300万規模の独立会計です。

過去3年間のWCSの実績を申し上げますと、91年はニューギニアの医療器具の致送を致しました。当該地区は先の大戦でアメリカ、日本両軍の激戦の跡です。多くの犠牲者が出ました。その慰霊をかねた使節団を派遣しました。

92年はヒマラヤの屋根、ネパール、ジョンソン地区の植林を行いました。その当該地域の人々が流木を伐採して、それを粘土にする、従って森林資源が枯渇したということなので、その意識を改革するためのコミュニティホールをも合わせて建設しました。

93年も同じくネパールの植林、そして道水路の建設、コミュニティホールの内部の充実、その維持管理のための資金の積み増しを行いました。

そして蔵並パストガバナーと同期のガバナーで、93年に超我の奉仕賞を受賞された杉山嘉一パストガバナーが、私どもの地区におられる。一昨年80歳を超えたとおっしゃっておられたから、もう現在、82歳、非常に元気なパストガバナーです。長らくWCSの諮問委員をしておられる。おっしゃるのには、WCSはカネだけを出してはダメなんだと、現地に行き、足を運びこの目で確かめ、額に汗する奉仕をしなくてはならない。そうする

ことによって相手との一体感、身の震えるような奉仕が味わえるんだということで、過去、何回かの使節団には、率先、参加されています。

従って、私どもの地区は、WCSを行うのは必ず現地へ足を運ぶことが地区の伝統という形になって今日まで引き継がれて参っております。

ポリオプラスに関しては、10年前の1985年に提唱されて3年後の88年にフィラデルフィア宣言、一応キャンペーンの終結を見ました。募金目標額、1億2,000万ドルに対して、倍の2億4,000万ドルという実績を上げることができました。

私どもポリオプラスは、ロータリー財団の人道プログラムに対しては、財団寄付という形で貢献すればいいんだという認識をしていました。フィラデルフィア宣言が出た以上、もうポリオプラスは私どもの手元を離れたと解釈しています。アナハイムにまいったら、絞り込んだR I の二大プログラム、会員増強、そしてポリオプラスがまいました。中島さんからWCSでポリオプラスをやってくれと言われても、ピンと来なかった。が、帰って地区の小西WCS委員長と相談し、再度、大阪に中島さんを訪ねました。そしてこのプログラムの重要性を再認識しました。

ポリオプラスのアジア地区の平岡正己コーディネーターを紹介されました。平岡さんの一歩先を見たご指導、ご助言というものを頂いて、今年度のWCS委員会は、ポリオプラスをやるということ腹をくくった次第です。

中島さん、平岡さんを窓口でロータリー財団と関係を持ちながら、WHO、世界保健機構のマニラ支局へ小西さんほか一名を派遣しました。ちょうどその時、マニラでは、カンボジア政府との間で、政府レベルでポリオプラス推進の計画が立案、調整中であったところへ、私ども2650地区の援助方法というもののがうまくかみ合って、2650地区から6,000万円10万ドル、ロータリー財団から30万ドル合わせて40万ドルが今年度、カンボジアにおけるポリオプラス計画推進の要であるポリオワ

クチン購入資金に充当するという事に決定しました。

カンボジア政府からの援助要請を受け、8月1日、マニラに出向いて、この条約に調印をして参りました。9月にはスイスのWHOの銀行口座に所定金額を送金して11月には現地の事前調査、というふうに事が運んで、明けて2月9日から15日、約一週間に渡って、杉山パストガバナーご夫妻、ローターアクト会員2名を含む27名の調査団を編成して、カンボジアのプノンペンに行き参りました。

2月11日が一斉投与の日でして、当日セレモニーの後、代々の使節団は都市部と周辺部、二班に分かれてポリオワクチンが0歳から5歳までの乳幼児に2滴ずつ経口投与されるその実情、というものを見学して参りました。

このようにしてポリオがカンボジアから駆逐されるんだなということ私どもが身をもって実感したわけです。使節団には関西テレビがシンガポールから3名派遣してくれて、私どもの入国時よりずっと密着取材をしてくれました。その実況が日本の全国版ニュースで流されるはずでしたが、当日、松本で爆発事故があって四人の犠牲者が出たという事故が発生して、残念ながらそれに食われて発表されませんでした。

しかしながら、後から編集し直されて、関西では実況が流されて、ビデオを送っていただきました。また、ロータリー友の編集長も本日はお越しですが、私どものこの使節団に同行されて、ロータリーの4月号には2ページに渡って、カラー写真入りで、また5月には随行したローターアクトを掲載して頂きました。

このようにして内外マスコミの温かいご理解、ご協力を得て、広報活動もうまくかみあって、十二分な成果をあげることができました。一行は一斉投与の前日に偶然にもカンボジアの今川大使とお会いする機会が出来ました。大使から約一時間有るに渡ってカンボジアの政治、経済、文化に対する現状分析、解説、特に日本との関係について非常に分かりやすく感銘深いレクチャーを頂きました。

2650地区の今回のポリオプラス計画推進に

ついて、深甚なる感謝の意、また今後さらなる援助の要請を受けて、私どもの面目をほどこさせて頂きました。

その後、本来の使節団の役目を終わった後、クメール文化を訪ねて、アンコールトム、アンコールワットを訪ね、素晴らしい石像文化の数々に触れる貴重な経験をさせて頂きました。

石像文化とはいえ、先の内戦で荒れています。このまま放置すれば、やはり崩れ去るのであろう石像文化に対して、今現在世界各国から援助、補修の手が差し伸べられています。日本政府もフランス、イタリア、イギリス、アメリカに伍して、その一翼を担っている、頼もしい姿を現地で見ました。

カンボジアは面積は18万平方キロ、日本は36万平方キロであるから約半分です。そこに人口はわずか900万。そして若い人ばかりです。GNPは250ドル、識字率は45%、乳幼児の死亡率が1,000分の116、世界の貧しい国の一つです。

我々はボルボト派と呼んでいるが、現地ではクメールルージュとっています。先の内戦、1970年からのカンボジア内戦において、このクメールルージュが自国内の男女を問わない知識人、経済人、お年寄りに徹底的な血の粛清を行って、その犠牲者の数は200万人にのぼったと言っています。先の大戦による日本の人的消耗が370万ですからその約60%にあたる大変な数字です。

カンボジアはこの悲しみに耐え、今、シアヌーク王政の下で平和への窓口を、糸口を取り戻したばかりです。世界、特に日本からの援助を待ち望んでおるといのは今川大使の言葉を借りるまでもありません。

カンボジア民族は12世紀から13世紀、花開いたクメール帝国の豊かな石像文化を生み、それを守り育ててきた立派な民族です。彼らを祖先に持つカンボジアの子供達の澄んだ瞳、また私どもが手を振ると本当に愛くるしい顔でこたえてくれる子供達の姿を見、私どもはカンボジアの明るい未来を見つけることが出来ました。

私どもは国際交流、あるいは国際化、国際

親善と申すと、どうも目が欧米に向きがちですが、私ども日本民族は西太平洋に帰属する、れっきとした東洋民族の一つです。この西太平洋地域にはカンボジア以外にも、自助努力以前の貧しい国がまだまだある、こういう国に対して日本はもっと援助の手を差し伸べるべきであり、それだけの力はもっております。

私ども日本のロータリアンがその先兵となって、また民間大使として国境を越えた社会奉仕、WCSを推し進めるべきだということを経験して感じたということを経験して添え、私の責めを果たさせて頂きたいと思えます。どうもありがとうございました。

**中島** ありがとうございます。二橋さん、もう少しあなたの持ち分の時間があるので、お尋ねをしたい。二橋さんの2650地区でカンボジアの一斉投与のとき、立ち会い27人行って、お帰りになられて地区の皆さん達と感動や喜びを分かち合われたということに私は大きな感動をしました。そこを是非、ご披露願いたいと、そしてそれが今年度のモンゴル支援に、また努力しているということを是非お話をしたい。

**二橋** 私どもの参加したのは、20名に会員を絞ってくれということで、その線で行ったが、どうしても参加したいという方が増えて27名になりました。放っておくと50名にも60名にも増えるわけです。

皆一般公募なので、カンボジアでWCSをやりたいと希望する会員が非常に多かった。帰りまして早速ビデオ等で各クラブに今年度行ったWCSのカンボジアでのニュースを流したり、小西委員長がそれぞれのクラブに出向いて、いろいろと説明し、来年やる時にはもっと大勢の人数が参加できるようにしてほしいという嬉しい要請も受けたということも事実です。

今年度は私どもはモンゴルで行うわけですが、モンゴルはこの11月になるとマイナス14度ということととてもできないということで、来年の3月がポリオプラスの一斉投与と聞いているので、その日を中心にWCS活動

を2650地区で盛り上げていきたいと思っている次第です。

**中島** ありがとうございます。先程の真崎ガバナーから今度のインドのポリオワクチン一斉共与の日もご紹介頂いた。今年の12月9日と来年の1月20日ですが、私も中国の一斉共与の時には、ロイスアビーさんと一緒に立ち会いに参って随分感動の場面がありました。本当にありがたいなと思って帰って参ったのですが、当地区からもぜひ皆様方のご浄財がどういう風に使われたかということを持ち会いに行つて頂いたらありがたいなと思います。インドの方々も是非私達の活躍を見てほしいと望んでおられるのでこの地区からも何人か12月9日か1月20日にお出ましを願って、自分の目で見、自分で喜びを味わって頂きたいと思えます。

次にお話願うのは、隣の地区というか近くの2620地区の加藤恒七パストガバナーです。加藤さんは1980年、81年と、87年88年の二度、地区ガバナーを務めた方です。国際大会への参加回数はおそらく日本一だと思うし、ロータリー研究会には本当によくお出ましを願って、日本のロータリアンで世界の方に一番よく知られた方だと私は思います。

そういう会合だけではなく、1990年のパウロコスタが提唱した地球環境の保全の運動に対しても、素晴らしいご活躍をされて今に至っている。環境保全というのは、日本人の常識、世界の常識の乖離というのは関係なく、グローバルに対応しなくてはならない問題として、環境保全での国際的なご活躍、そして会合での外国人との出会いの中でそこから見た日本のロータリーの国際奉仕のあり方がどうなのかというお話も伺いたいものと思っています。加藤さん、よろしくお祈りします。

**加藤** 中島さんの事前調査が行き届いているので、変な自己紹介になるが、私はここに加藤恒七と書いてある。ところが、日本の国から外に出て加藤恒七と言っておくことは一度もありません。ツネシチなんて大体西洋人は発音できない。私はある理由で、絵を27~8

年前に初めて描いたときに、横浜のクラブにマスダヨシノブという絵描きがおる。私の初めて描いた絵をドベタだと……しかし何とこの匂いはオンリーブソウ……そのままじゃないかと言ってくれた。それから私は加藤安里なんだ。だから今日持っている日本文の名刺も加藤安里になっています。

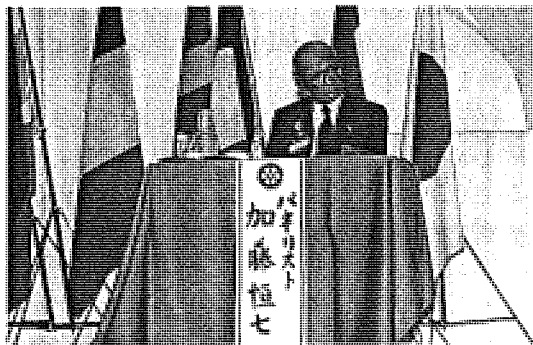
話題を変えて、大体この地区に来て私がお話しするのは、まるでいこの前でお話をするようで、何か格好がいかだか悪いか、親しみやすいのだが、とてもしゃべりにくい。と同時にバカに気楽すぎる。この地区と私どもの地区は22年前、甲府の今井という方がガバナーをやったとき、神奈川県、静岡県、山梨県が一体で359地区とっていた。甲府で地区大会をやった。そういういきさつがあるから、よその地区に来てパネラーだかパネリストだかやっているような気分があまりない。気楽にモノを言うからどうぞ失礼な点があったらご容赦を。

さて国際理解、私はとても難しく考えていません。地球の上の55億か57億になっているか知らないが、到底救えないバカな人類だと思っている。これを徹底して調べてもらなさい。本当にバカな人類なんだ。そこらの樹木だとか蟻だとか、ネズミの方がよっぽどお利口さんよ。私はそう思っている。これは、環境の立場からあるいはその他から。

ところが理解っていうと自分の家から一歩も出ないっていうと何にも理解できない。よその国に行ってみるとか、よその人と話してみなくちゃダメなの。毎朝メシ食うとき、わが庭もよきもんじゃな薪もあるしってなもんで、一応緑を見て満足している。三百坪くらいあるか、過去何年ぐらい前か知らないけど、私は某広大なお屋敷に行って腰を抜かしちゃって、何だ自分の家はあれでいいつもりでいて思った。自分の家だけ見ていたら、そう思うんで、それで幸福かもしれないが、理解にはつながらない。国際理解っていうのは、そんなもんじゃないかと私は思っています。

その大きなお屋敷っていうのは、浄明寺とかいいまして、目の前においでになる講演者の方のお屋敷で、驚いてしまったわけだが、

この近くにも吉田茂さんのお屋敷がある。そうすると自分の家のたった千坪だか三百坪だかのグリーンを見て喜んでいてというのは、誠に浅薄なことになる。



わが日本を見ていて、あ、これでいいんだあとすべて思っていれば国際理解なんて前に出やしない。それで機会があればあるほど私は機会をつかまえる。1980年に私は、隣の2590地区、加藤進治さんと一緒に、ノミニーになるべく教育を受けたわけだ。

そのとき、私は世界中から372人来ていて、よしこん中からまともな奴を友達にしておこうと思って、私はおよそ20人ぐらいの友達をつかまえた。その中で、モノのいい奴もある。一例を挙げると、シアトル、今の5030地区だが、シアトルの同期のガバナーで、ドクターベン・キャシュマン、UW、ユニバーシティオブワシントンの教授なんだが、もうリタイヤしているから名誉教授。これは長く縁が続いているし、こいつのお陰で、その教授を教えた教授、これお年なんだが、これまた大変、アメリカの学者の中では、ピーと飛び出た男なんだ。ジョージ・テラーといって、トルーマン以下の大統領はみんな彼に相談をしている。何の間違いか知らないけれども私の事を日本におけるかけがえのない友達とそのベン・キャシュマンの紹介で、そのジョージ・テラーが言っている。

私はチャンスは逃さない。ベン・キャシュマンが教えた人間でドナルド・ヘルマンという奴がいる。こいつ今度のAPECの副議長で日本に来るとか言っている。従って今のクリントンのコンサルタント、顧問で、こいつを通じると私は相当便利なことができるなあ

ということをやっている。

何にしてもチャンスを絶対逃さないっていうのが私のやり方のつもりです。コーディネーターがご紹介してくれたが、この前の6月にニースへ行ってきて、多分21回目の国際大会だ。この数年、国際大会と国際研究会と張りつけていうからニースの研究会で研究会は11回目だと思う。1980年から今年の95年から15年間に11回も研究会に出るなんて、どうかしている。ま、何とか旅費、償いました。

従ってそういうチャンスを片っ端から私は生かす。それで向こうが分かる。向こうにもこっちを分かってもらう。日本の事情も説明する、というようなことをやってきている。

それに関連して私はロータリーにおける活動、むしろWCSも関係ある。青少年交換も関係ある。それを貫いて、重要さを自らで発見して財団を利用してこういう形がいい。で私はチャンスを逃さないようにやっているつもりです。

そんなお前、調子のいいことを言うけど英語しゃべれるのか？という顔が出ている。ちったあしゃべるんです。それでR Iの職員どもやらこの頃の理事やら何やら知っている奴、いっぱいだから。ああアンリーよと私のことを言う。アメリカ人はアンリーなんてフランス語のしゃれた発音はしやしない。ヘンリ、ヘンリという。まあ知能程度の低いアメリカ人ならそれでいいやと思って、私はヘンリーに対して、オーと言っている。

「ヘンリー、お前はフランクに続いて英語うまいな」ってこう言う。これは大変な外交術で、フランクって中島さんのこと、もしもフランクに続いてなら私は十等賞ぐらいには入っている。フランクに続いてなんて、これは外交辞令もいいところだ。

だけど、ちょっとはしゃべれるから、さっきから申し上げていることが何とか成り立っていると私自身思っています。そこでお隣の屋敷に行ってみないと、佐藤千壽さんの大きなお屋敷に行ってみないと自分の屋敷の千坪だか三百坪だかの庭がこんなもんだなと喜んでいてというのが目を覚ますわけだが、日本に住んでいて果してこの国はデモクラシーの

国でしょうか今、それを私はこのごろ何度かアメリカに行って来たりして実際に比較してみます。

ちょっと前の話で恐縮ですが、アメリカの商務省に自分の仕事柄行ってみた。大きな商務省の建物の入り口に行くと案内のおばちゃんがいる。下手ながら「グッモーニン」と言う。「グッモーニン」と返ってきた。それで田舎者のような顔でボヤっとしていると「何の御用でいらっしゃいますか？」という。お。これはデパートに来たんかいなと思う。日本の役所でそういうことはあり得ますか。

実はこうこうこうだつて言う。「あーそう繊維関係の方なら457号室のミスターフレデリクソンにお会い下さい」って。こっちはなおずるい顔して4階に行くならって顔をしていたら「どうぞどうぞ」ってそのおばちゃまが連れて行ってくれる。4階の57号室へ。トントンとたたいて「ミスターフレデリクソン」と言って私を紹介してくれてこの人、こういう用よ。ミスターフレデリクソンも、さっきのおばちゃまと同じような言葉で「What service can I do for you?」と言うわけで、何、調子のいいなあ、デパートに買い物に来たわけではあるまいと思って、こうこうこういう資料をと言ったら、まあパンフレットを引き出しから出してきて、だんだんこんなに高くなる。困ったな、ポケットにドルはあるかい、心配していたら最後にこのぐらいの厚い本を一冊、B4ぐらいですが持ってきて「これはお客様1ドル頂きますよ。あとは皆差し上げる」ハハ、ポケットに1ドルくらいあるわいい気持ちだった。

だが、これが商務省という役場。日本の通産省に行ってそういうことが起きるかどうか。その時、私はひどく疑問を感じました。

もうひとつ余計なことを言うと、私小さな屋敷をアメリカのシアトルの北に持っている。12アールぐらいか、日本の坪で1万5,000坪ぐらい。税金の通知書が毎年来る。大したカネじゃないが18ドル、それを全部分類して、この18ドル頂戴した税金は、2ドル50セントは散水車に使います、1ドル50セントは消防の用意に使います、とか何とか区分けしてある。

どっか日本の地方自治体で、これを真似しだしたところがあるとかないとか聞くが、これが本当のデモクラシーだなどたらめじゃあないかと、どっかの国はでたらめで、どっかの国はデモクラシーかいなと私は大変実感しました。

そんな経験、まだまだたくさんあるけれど、日本だけにいるとなかなかデモクラシーって何じゃろうと分かっているような分からないような話です。この国は私は神武天皇以来、明かに封建制度だとただ今、個人的に自覚しています。

さて、エディーチュアというフィリピンの3800地区のバスターガバナー、お若いバスターガバナーで、それでも1990年～91年、お土産持ってきたり、感謝状持ってきた。今、3人とも出席していないと思うが、三人ともよく覚えている。それも無理はない。何でもあそこに行ったから。私自身、下手な絵を描く。下手な絵を描いて自ら個人でWCSに放り込んだカネが今までに2,500万円。11年ぐらいで……アルゼンチンにもおカネがいらいます。フィリピンにもシンガポールにもいらいます。方々にいらいます。こんなこと何にも誇らしく言いたくないけど、これはいわゆるボランティアサービスじゃないかと思って、ウィルマ・ホワイトというマガジンのおっさんに言ったら向こうから加藤さん原稿書いてくれっていうから書いてやったらそれから今に至るまで全く無視されているから、あいつ嫌い、私。

ま、何はともあれ、こんなこと広告する必要ないが、エディーチュアが来ていたので、思いだしたのは1979年にフィリピンの3800地区の小さな町に行って、これも絵で稼いだカネでタンクを、それまで何を飲んでいるのかというと、雨水だと。それじゃあ病気になるだろうとまことに病気多発だ。それはよくないというわけで大きなタンクを直径2メートル長さ8メートルのタンクを6つ据え付けて、小さな蛇口をこれも6つ付けて住民に供給できた。

その後に行ったら、小学校ではおトイレがないっていうの。校庭内、全部見たら、校長

に「どうしているの？」って聞いたら「見て下さいよ」。こんなに広い敷地に高い塀があるでしょ。あれに張りついて男も女も用を足している。これも病気の原因でよくないぞって言った。わずかなおカネをやはり絵で稼いで贈りました。

その後また行ったら、生徒二部制で2,000人だって「2,000人がこれで用が足せるの」って言ったら「何とか」これはもう少し追加しなくちゃいけないと自責の念にかられた。

食事のこともやったし、93年には東マレーシア、93～94年にはタイ国、去年はフィリピン、南北両方へ、毎年大体2万5,000本くらい木を植えている、苗木を。日本から150人くらい来て、向こうが歓迎して800人くらい出て来る。相互理解につながっているんじゃないかなと自負しています。 以上。

**中島** どうもありがとうございました。加藤さん少しお伺いしたいが、あなたの豊富な外国でのご経験を通じて、外国から見て日本の各ロータリークラブの国際奉仕の活動に対していいアドバイスがあったら頂戴したいと思います。

**加藤** ロータリーの活動自体において、同じようなことをアメリカでやっている、ヨーロッパでやっている、オーストラリアで、南米でやっているなんて絶対思わない方がいいと思う。こっちの方がいいこともある。が、向こうのことを参考にせにゃならんこともある。4年ほど前に、ベン・キャッシュマンの招待で私は、アメリカ西海岸の次年度会長研修会、ベッツとかいうが、行ってみてびっくりした。アラスカからカリフォルニアの一番北の地区まで九地区合同のベッツ、シアトルのシータック空港の中みたいところにレッドライオンというホテル、ベッツが2泊3日、けちよんけちよんにやる女性会員が出てきた時分で、477クラブあるはずが、455になっていて、そこで私は環境の話をしたら、その35人いるインカミング会長、みな女性。それが一番痛烈に私に突っ込んできた。

日本通りやっているのが世界中の通例だと

思わない方がいいと思う。ただしこっちの方が優れていることもある。参考になることも大いにあるように私は思います。

**中島** ありがとうございます。今申されましたベッツの2泊3日、日本の場合はほとんどが1日ですが、ガバナーノミニが自分が自分の年度にやりたいということすべてクラブ会長に伝えてその気になってもらうには一日では足りないかもしれない。私も充実したベッツを持つことは非常に賛成です。

それでは遅くなって、竹山さんお願いしたいと思うが、竹山さんの国際的なご経験というのはこれまた大変ユニークでして、私は若いときから商売をやっておるが、その相手が非常に先祖をたてまつられる。ご両親を大事にされると聞きましたときには、本当に安心して相手を信用します。

ロータリーにおいてもすでに90年たつておるわけで、歴史も伝統もあって、このロータリーの持っている歴史とか伝統を非常に大切に思われて、特に創立者であるポール・ハリスの足跡を大切に残したい、それをできるだけたくさんの人に同じような思いになって頂きたいということでご努力なさっている、竹山さんにぜひそのお話を伺いたいと思います。特に皆さん方に竹山さんの話を披露してもらいたいと思ったのは、アメリカサイドで私はエバンストンでそういうことに一生懸命になっておられるアメリカのロータリアンにたくさんお目にかかった。

その方たちと国際的な友情の輪が広がって参って、その友情を見ていると本当に国境がない。創始者を大切に思い、その歴史や伝統をきちっと残したいという思いを通じての友情に本当にうらやましいものを感じました。それも日本での運動のリーダーをして下さっている竹山さんにぜひその模様を皆さん方にお伝え願いたいと思ったわけで、竹山さん、宜しくお願いします。

**竹山** はい分かりました。これからお話するのは果して今日のテーマと密接に関わりがあるのかなと、事前に戸惑っていましたが、中

島さんの方からぜひということです。私自身、それほどの国際人ではありません。今の加藤さんのお話を聞くと、私は4分の1かおそらくそれ以下の国際的な接触しかないと思う。商売柄、ロータリーを除いては、そういうものを持っていないから、その他のことはよく分かりません。ただ私自身、縁があったか、気性に合ったか昭和31年にロータリアンになってからもう71だからちょうど今年で40年だったのか。その間に随分、ロータリアンがいやになったこともあった。逃げ出そうかと思ったこともあったが、ひょっとしたことから「マイロードトウロータリー」の小録を発見しました。当時の副会長に励まされて、それを何とか、難しいです、ポール・ハリスの文章は。多少若かったので、やっているうちに、それまでのいろんな分からないことが分かってきた。それが私ロータリーの歴史に多少、触れるようになっていったきっかけでないかという風に思っています。

昨年12月の29日に、皆様方の中にもご承知の方、おられると思うが、エバンストンで世界本部と今は言われているが、歴史的な式典が行われました。16階の中に初めてロータリーが開かれた例会場がそのまま再現されました。これだけ聞くとああそうかで終わるのだが、私はその努力をした711号クラブ、正確にはポール・ハリスが付くが、この皆さんといろいろと部分的に接触しているうちに、大変なご努力をなすっていたことが分かりました。

一口に言いますと、1980年、ロータリーができ上がって75周年のときにシカゴで大会があった。その折にシカゴのダウタウンにユニティービルがあって、その711号室に、1905年2月23日にロータリーの創立者たち4人が集まった日であるこの場所があったわけです。で、これを何とか当時の形に復元して末永く保っていこうというふうにして生まれたのがシカゴクラブの同志、有志の皆さん、一部の方でつくられた711号クラブでした。

ところが、決してタダではできない。そのまま賃貸もかかるし、いろんな装備も必要。大会期間中、5,000人の会員と、家族がそこ



を見学されたという話です。大変なご努力だったと思う。だんだん資金が底をついて22のご夫婦というかシードマネーを出し合って、一つの資金をつくって、これを維持するようになりました。

89年、つまり9年後に大きな難関が訪れる。この建物をどうしても古きが故に壊さなくてはならない。それで皆さん考えまして、ミッドランドホテルという近くのホテルに移しました。その前後で一つしかなかったシカゴクラブに二つ目ができるわけです。

そしてほとんどの方はシカゴクラブから分離してそこへ行った。私の友人のノーマン・クロウカもそこへ移った。彼は1989年～90年の6450地区、つまりシカゴを含む地区のガバナーの経験者です。

彼との触れ合いはその後なんだが、そして何とかこれを理事会に進言して、1993年、一昨年の理事会で承認されました。これはあくまでも711クラブという立場でいろいろ申請してやっと許可になりました。

聞けば4万ドルの維持費を持参金として付けたという風に伺っている。それが昨年10月の29日、献納式につながったわけです。このときの模様は一部ザ・ロータリアンにも報道された。なぜか友の方には詳しく出なかったのは残念なんだが、いろいろシカゴクラブゆかりの方、あるいは900名を越えたと言われる711クラブの方々のいろんな苦心談が語られておるようです。

それからもう一つ、ポール・ハリス、ないしは創立者たちを大切にしようというコミューティーがある。ポール・ハリスメモリアルコミティー、記念委員会と申しましょうか。こ



れはほとんど役員の方がオーバーラップするんだが、ポール・ハリスのお墓はシカゴの南部のブルーアイランドと称する所、マウントホープという墓地がある。そこに親友のシルベスターシールと2人で眠っている。私が1983年、ノミニーのときに、ここをみんなで訪れました。本当に草むらに小さな墓石がボンボンとあるだけ。何の装いもなかった。

この地区の中のブルーアイランドクラブが、1976年ごろに墓守りを買ってでた。1980年ちょっと後に、ここにポール・ハリスメモリアルコミティーってものが誕生した。これは当時、6450地区のガバナーの肝煎りで、確かセドリックポークさんという方で、お亡くなりになっているが、で、この方々の努力で、プレジデンシャルウオークウェイというのが見事、完成しました。二つのお墓の所の位置に立派なモニュメントがまず出来ました。これは1988年で、1992年には中に歴代のR I会長の名前を刻んだ大理石がずっと立って、いわば遊歩道のようなものができました。

こういった活動と関連して、ノーマン・クロウカさんという人は、その後、引退するまで何とかこれらの連中でその他のロータリーの記念物を守っていきたくないかと、こういう風なご意図を持ったわけです。

私は私で全くその活動を知らずに1988年のフィラデルフィアのときに、初めて、今の遊歩道の出来つつある状態も見て参ったし、シカゴのダウタウンとの間の位置にポール・ハリスさんの35年の住んだお家がある。そのお家を見て参りました。私の学校の後輩に当たる伊藤義郎理事が、行く前にR Iのことを知っている皆さん方、とくにご存じのハナカワさんという日本人職員を1人エスコートしておいてくれた。彼が自分の車で私と私の友人2人を案内してくれた。

そして私自身が10年ほど前に自分でいろいろと苦労して翻訳したポール・ハリスの本当の自叙伝の生の光景をそこで見たときに、これは何とかしなくてはならないなと感じを持ちました。

日本に帰ってしばらくすると、初めてのノーマン・クロウカさんの手紙が参って、何

とか竹山君、日本でも力を貸してくれないかと。お金ばかりじゃない。君の言う通り、実はミスターハナカワから聞いて自分で電車に乗って、カブリーバンクを見てきた。カブリーバンクというのは、今言ったポール・ハリスさんのお家ですが、住人は四代目で、ケネス・バトラーさんという黒人のご夫婦が住んでおられる。非常に優しい方だ。彼とよくお話をしてきた——という便りを頂いた。

それからノーマンさん自身は今の2つのグループと別に、もうちょっと広くロータリーの歴史を大切にしようという風なRHHIF、つまりロータリーヒストリー・エンド・エビティジ・インターナショナル・フエローシップというものをおつくりになった。ちょうどこれは神のお告げみたいで、その前後に私、突然R Iから手紙が参って、世界親睦活動の実行グループのメンバーをやれと、こちらの隣の地区の津田先生、今日見えてないかもしれないが、あの方がやっておられたその後をやってくれというわけです。ひょっと見ると、世界親睦活動の相手の中にロータリーの伝統グループというのが、たった一カ所ある。このことだということが、私は分かりました。

従って私の立場はそれ以外の、いろんな親睦のつながりをする役だったのです。これは日本と台湾と韓国、この3つを受け持ったのですが、私が一番近く感じているこの団体のことを平行してやらざるを得なかった。従って一昨年から去年は非常に忙しい目に遭いました。そういうことを通じて、ほとんどノーマンさんとは一度だけ、オランダ大会でお会いしただけだが、その他、スタッフの皆さん方の一人には、ザ・ロータリーアンの編集長であったホワイトさんもおる。実はここにある小さなかけら、これはホワイトさんがちょうど1889年にユニティービルが壊されることに決まったこの後そのときの例会場の床材を小さくかけらにして、自分の所のキャンデーアイザックという女性の記者を使って私の所に送ってきたものだ。これこそ当時の例会場の床材なのです。現在も、これはまだ出来上がったものは見ていない。16階にはその当時のこういうものがそのまま再現されておる。

窓から見る当時の1905年前後の、あの当時のシカゴの街がそのまま写真になって見えるような状態になっているそうです。

こういう興味をひく問題だけではなく、そういうものを大切にしようじゃないかという意向は、最近特に多いようです。私、この友の2月号にそれに関する何かを書いた記憶があるのだが、1980年以降、今、15年ぐらいたちましようか、その前まではさほどそういうものは見受けられなかった。一斉にそういうものが活動してきた。私、そこに何かあるんじゃないかなという感じがしています。

例えば、この間にロータリー、そのものが大きく変わっております。女性会員をはじめとして、共産圏の崩壊といいますが、あるいはそこへの拡大といいますが、あるいは第三世界の拡大といいますが、あるいはいろんな意味でのロータリーの変革期が訪れている。あえてそういうときを選んで、こういう古いものを大切にしようという動きが出てきたのは、やはり私の一人考えかもしれませんが、初心に戻ろうと——こういった一種の反省がだれから言い出すともなく一つの動きとなって出てきたのではないのかなという感じがします。

ごく最近になりまして、ロータリーの伝統と歴史の会、さっき申し上げたRHHIFですが、日本に約150人ぐらいの会員ができて、年会費が何しろ1,000円ですから、10ドルですから、これはもう何もできません。アメリカに大体400人ぐらいできているようです。そのほかにブラジルにもあって、全部で600人ぐらいになったようです。ここは別にどえらいことをしようとか、何かしようという活動は今までは持っていなかったんですね。会報を年に2度出していますけれども……。

ノーマン・クロウカ、今でもこの方は会長をしていますが、彼から手紙がありまして、カムニーバンクを何とか残さないかという風なご相談がありました。あくまでもこれはプライベートな相談です。ごく最近の話では、会長エレクトさん、私、名前を失念したんですが、それと、セブンイレブン、つまり711

号室の会長さん、こういう方々がエバンストンに集まって、何の関係か相談をしたと。で、ノーマン・クロウカが案内して、例のカブリーバンク、あるいはプレジデンシャルウオークウェイに行ってきたと、非常に彼も乗り気なんで——という風な話が来ました。

で、日本も頼むぞと、こういうことだったのですが、私の意見として、日本も頼むたつて、今、日本だってそう決して楽な時期じゃありませんけれども、まずアメリカでそれをつくってくれと、基金でも何でも、シードマネーでも何でも、そしてその辺の入手経路を、方法などを研究してくれ、そして一つの形が出来上がったなら、私のできるだけのことをしようじゃないかと。私にしたって決して大金持ちでもないし、日本のロータリアン、必ずしもそう、すべてがお金持ちとは限らない。ただそういうものを大切にしようという人は、多く知っているのだから、さらにそれを何とかしようじゃないかという風な、通信が参りました。

ごく最近のことですし、これに対してどうなりますか。将来の問題として楽しみにしておるんですが、それと平行しながら、私、世界親睦活動の仕事をしました。この時もびっくりしたのは、一つの例をスキーにとりまして、アメリカとカナダにスキーの会長がいるのですが、昨年、私がまだ任期中に、アメリカのスティームボートというスキー場でスキー大会をやる。札幌はスキーの冬のオリンピックで有名なんだから、だれかいるだろう、何とかして出してくれという意向がR Iを通じて来ました。

これはまた私の問題なんですけれども。ジャネットさんという方がスキーの同好会の会長でして、現在地区ガバナーになっていて、その時に私は国際スキー連盟の伊藤義郎さんにも相談したところ、「うちのクラブにある人がいるから紹介するよ」。実は加森さんという方がスティームボートの持ち主だったんですね。びっくりしました。それで、早速、札幌で50~60人仕立てまして、そのスキーの大会に参加してもらいました。

こんな風に、そういう道は非常に開かれつ

つあると私は思うのです。まことに私事だけで終わってしまつて恐縮ですが、感じたままを申し上げました。最後にこういう言葉を私、ある本から教わりました。大事なことだと思つて、これからも肝に銘じていこうと思つております。こういう言葉です。これはクレムヌフさんの、1975年、6年の元会長ですね、もう亡くなったと思ひますか、クレムヌフさんのエマーソンの言葉としてある本に書いてある内容です。

「組織は、しばしばその拡大発展の活動の投ずる長い陰影の中に、一」これは現文に忠実に申し上げます。「組織はしばしばその拡大発展の活動の投ずる陰の中に、創始者の人物を埋没させることによって、痛烈なしっぺ返しを受けることになるものだ」という言葉。

私はこれはロータリーに必ずしもこれにだけ適用するものではない、さきほど中島さんが冒頭に言われたけれど、創立の精神というのは、いつまでも大切にすることであるし、また創始者自身への敬意というものも、やはり自主的に大事にするべきではないのか、という風に感じております。以上です。

中島 ありがとうございます。

竹山さんは83年、84年の2510地区のガバナーです。私、ガバナーノミニもやっています。ずっと前に、札幌の当時、251地区の地区大会に寄せて頂きました。竹山ガバナーのお話を伺ひまして、本当に素晴らしいガバナーだな、と驚いたわけなんです。

伺ひますと、竹山さん、そのころはラジオ放送で毎朝、青少年向けに、ずっと連続でお話をしておられたと伺ひました。これではお話が上手なはずだと、非常に説得力のあるお話をなさるのは当然だなどと記憶があります。

今日も、非常に静かにお話を伺つたわけですが、竹山さん、冒頭におっしゃいましたように今回のテーマに今日お話を伺つたことは脈絡がそう強くないかもしれませんが、私は、この運動を通じまして国際的に頑張っておられる皆さま方のありようを見ておられますと、私たちの創始者を大切にすること、お墓を大切にすること、住んでおられた家を大切にすること、

共通の行為を通じまして、すごいきずなど申しますか、一体感があります。

そういう強い一体感の中では、理解が深まっておるわけですし、こういったことも国際理解を深める手だとして非常に大切なことだと思ひました。そういうこともあつて、ぜひ皆さま方にお話を伺つてもらいたかつたわけなんです。

お話の中で竹山さんが触れました、ロータリーの歴史や伝統を大切にすることがだんだん盛んになってきた一つの理由として、初心に戻ろう、原点に帰ろうという流れがあるんじゃないかとおっしゃつたが、私、その通りだと思ひます。明らかにこの会の隆盛は、そういった流れに添つてきたものだと思ひます。あと十分残すのみになりましたが、皆さん方の中でお話し残しになっていることがありましたら伺ひを致したいと思ひます。

二橋さんの所の地区は、今、日本で一番大きい地区で、ロータリー財団へのご寄付もダントツでずっと続けて世界一ですが、それ以外にも、世界社会奉仕も非常に盛んでありますし、カンボジアの寄贈以外にも、何か披露して頂いて、今日のシンポジウムのタイトルに役立つようなことがありましたらご披露して頂きたいと思ひます。

二橋 WCSに関しましては、今年度はポリオプラスをやる計画は、最初はなかつたんです。フィリピンの井戸を掘るといふ所へ、話がいつておりました、そちらはWCS委員会がやりました。国際協議会へ出させてもらつて、中島さんから強い要請を受けたと、やはりやるべきだということで、今度のモンゴルを決めたわけなんです。カネがないわけですね。従つて各クラブに募金箱を置いて、各例会ごとに一人が100円ないし200円を毎回入れようと、そういう形で今募金活動をやっております。それが集まつて今度のモンゴル資金になると、いふふうな形で現在資金を集めている最中なんです。これをやりますと、地区全体が一人2,000円で天引きされるよりも、我々のカネがポリオプラスに使われるんだということの実感が深いんじゃないかと思ひます。

中島 加藤さん、竹山さん何かお話になることありますか。

竹山 時間の関係ではしよつたのですが、ポール・ハリスの足跡をたどる旅のすすめというのがあります。これは、ロータリーの歴史と伝統を守る会（しゅうきゅう）で、一日コースとしてはラシーンという彼の生まれた町からエバンストンへ行きまして、エバンストンで、例会場の再現とか見て、シカゴへ行って、シカゴは、まだダグマリノガレストラン、つまり、ロータリーをつくらうよといつて、相談をしたシルベスターシールドそのレストランがまだ残つております。それからカブリーバンクを見て、最後はマウントホープの墓地へ行ってみるというコースですね、半日でもできるかもしれませんけど、非常に楽しい創始者への接触の場であると思ひます。

もう一つはニューイングランド、つまり彼が15年間、3歳のときにおじいちゃん、おばあちゃんと過ごし始めてほとんど成人するまでの間、過ごしたウォーリンフォードを中心とする旅のすすめ。こういうものがR H I F Fである程度ルート化されます。これは別の機会でご披露することが出来るかもしれません。その時にはぜひご参加される方はして下さい。あるいはまた、こういったもののプログラムについてビデオがあります。札幌南ロータリークラブ、私のクラブにそのビデオが最近できました。例えばシカゴクラブのチャーターメンバーの写真も全部入っているビデオもありますので、どうぞ遠慮なく申し出下されば、いつでも差し上げることが出来ます。どうぞ自由にお申し出願ひたいと思ひます。以上でございます。

中島 ありがとうございます。真崎ガバナーもお出ましですね。今日はタイトル「ロータリーは国際化を促進できるか」ということで皆さん方にお話を伺つたのですが、シンポジウムですから、答はもちろん出ないわけですし、しかもこの問題はそう簡単ではありません。

例えばボスニア、ヘルツェゴビナなどは逆に国の中にきわがたくさん出来まして、問題が起こつたわけですし、他にもたくさんそういうケースが出ています。だからきわをなくしていく努力というのは並大抵のことではありませんが、ロータリーこそが地道にそういう努力を重ねないとどうにもならない今だと思ひます。

今日、皆さん方にお聞きしたのは、いろんな種類の国際的な奉仕を通じて国際的な理解を深めるために努力して下さっている方々のお話です。いろんな方法があるんだと思ひて頂いて、これからの自分たちのクラブでどういふ方法がとれるだろうか、とお考え頂く一石を投げられたことになれば非常に幸せだと思ひます。

本当に90分の間、ご聴取頂きましてありがとうございました。御礼を申し上げます。またシンポジストの皆さん方には竹山さんは札幌から、二橋さんは滋賀県の四日市からお出まし願ひまして、加藤さん、ちょっと近ごろでございますが、お年は私の二回り上の84歳です。本当にありがとうございました。心から御礼申し上げます。皆さん本当にありがとうございました。

(文中の\*印は氏名が判明できませんのでカタカナで表示しました。)